
NORMALIZE

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NORMALIZE

【Nコード】

N5615Z

【作者名】

hayate

【あらすじ】

入学および在学条件 『天才』であること。このたった一つのルールを掲げる天樹学園。日本の未来を背負っているとも言われるこの学園に、一人の少年がスカウトされた。名を、高瀬一夜。彼は、何一つ才能のない人間だ。 そんな一夜が、『特殊な天才』たちがひしめく『マイナー・クラス特別校舎』に所属した時から、物語は動き出しはじめた。

プロローグ（前書き）

どうもこんにちわ、h a y a t eと申します。

天才と凡才、そんなテーマのお話です。ただし、ガチで頭がいいとかわるいとか、音楽ができるとか絵が上手いとか、そういうのとはちょっと違います。あくまでアクションなのです。

一人でも読んでくれる人がいるような、そんな作品にしたいです。

プロローグ

天才。

凡才。

言葉にすれば、この程度。

だがそこには確かに、厳然たる差があつて、それは誰もが心の奥底ではわかつていること。

才能の有無、それだけの違い。

しかしその『それだけ』が、時に大きな差異を生み出す。

あるいは、時代さえ変えてしまうほどに。

ならば。

もし、仮に。

その因子たる天才を集めることができたとしたら、何が起こる？

誰にもわからない。

わかるわけがない。

だけど。

世界を変えてきたのは、いつだって天才だ。

だったら、天才が一点に集結すれば。

そこにはきつと。

何かが起こる。

『彼』がそう考えたのが、今から五十年前の話。

* * *

高瀬^{たかせいぢや}一夜は逃げていた。

それもおそらくは、この短くは無い十五年の人生で一番の必死さで。

「はっ、はっ、はっ……ッ！」

緊張からバタバタとやたらうるさくなる足音を自覚しながら、ひたすら走る。

まだ五月になったばかりだというのに、その額からは玉の汗が見て取れ、適度に切りそろえられた黒髪も皮膚に張り付いている。

今朝、採寸以来初めて袖を通したブレザーの制服も、今は発汗を促進する効果しかない。

「はっ、はっ、はっ……ッ！」

そこは、とある学校の廊下だった。

ただし、一般的なそれとは、大分異なる。趣自体はそれほど変哲というわけではない。ただ、こういった事情からか、やたらと破損箇所が多かった。

見えるだけでも、床（リノリウムだろうか？）に空いた直径十センチほどの穴、中ほどが斜めに切られて面積が半分になった窓ガラス、天井には焦げ痕まであった。

おかしい、どういうことだ、と一夜の胸中で疑念が渦巻く。

さっきまでいた西棟はこんなものでは確かになかった。開校から三十年が経っているとは思えないほど綺麗な造りをしていた。

だというのに、なんだこの有様は。いくら別棟とはいえ、なぜこれほどの違いがあるのか。

流れる景色のなかにこれらの惨状を確認して、一夜は思う。

（くそっ！　こんなところ来るんじゃないかった！）

微妙に涙目になりながらも、廊下の端まで走りきり、即座に体の方向を変える。

案の定そこには一階から二階に上がるための階段があり、一夜は一も二もなく、その最初の段に足をかける。
その時だった。

「待てコラあ！　吹き飛ばすわよ覗き野郎！」

突如、不当な呼び名と不穏な命令が耳朵を叩き、少年は慌てて振り返る。

マズイ。この声は確か、そう。一ノ瀬初花いちのせはつかとかいう女の声だ。
確か、八雲やくもから聞いた話では、こいつの『才能ギフト』は

「　　つと、そんなこと考えてる場合じゃない！　とにかく逃げないと」

回想を途中で打ち切り、逃走を再開するために体の向きを戻す。
と同時に、一つ息を吐いた。

焦りはいまだ消えていなかったが、それでも今の声で少々余裕が持てた。おおよその予測ではあるが、音量からしてまだ自分とはもうすこし距離があるはずだ。追いかけてくるコースが自分のそれをなぞっている以上、そうそう簡単に追いつかれることはないだろう

という一夜の『甘い』考えは、
まったくの予想外、もしくはある意味予想通りに、
簡単に打ち破られる。

「吹き飛ばッ！」

先ほどの台詞の後半と同意義の怒号、しかし明らかに違いがあった。

吹き飛ばすわよ、と、吹き飛ばへ。

その差異に込められた意味をわずかに思考した瞬間、

ドンツツツ！ と、一夜の背後で爆発が起こった。

「な、あ ツ！？」

のみならず、当然のようにそれに追隨する形で、とんでもない爆音が鼓膜を、衝撃が肢体を襲う。駆け上がるうと足に力を込めていたことも手伝って、一夜は一気に階段を上りきった。

が、勢い余って踊り場にたどり着いたと同時に、思いっきり足がもつれ、勢いそのままに壁に激突した。

……それも、頭から。

「~~~~~~~~ツ！？」

声にならない叫びを上げながら、一夜はごろごろと床の上を転がりながら悶える。

はたから見たら相当に間抜けな行為に間違いないが、幸か不幸か踊り場にも二階に至る階段にも誰もいなかった。

十数秒たって、ようやく痛みが薄らぎ、

「ああもう！ なんだってんだよ畜生！」

がばつ、と床に両手をついて上半身を起こし、一夜は叫びを上げる。

上げてから、何が起きたのかを考える。

とはいっても、既におおかたの見当はついていた。ただし、非常に認めたくない答えだったが。

状況が、解答を如実に表している。

辺りに立ち込める黒煙。

鼻につく火薬の臭い。

そして、一階廊下の端の床、つまり先ほどまで自分がいた場所のすぐ後ろ、そこにはつきりと残った焦げ痕。

ここから導き出せる解答は

それを心中で呟くよりも早く、

彼女が姿を現す。

「　　ったく。ずいぶんとまあ逃げたじゃない、変態覗き野郎。アタシから逃げられると本気で思ったわけ？」

なんのためらいもなく、彼女は上履きで焦げ痕の上に立つ。

煙る視界の中で、破壊の爪痕をステージにして、

彼女が立っている。

傲然と。

自然に。

まるでこれこそが自分の舞台だと言わんばかりに、彼女は屹立していた。

一夜が、呟く。

「一ノ瀬、初花……」

その言葉が、聞こえていたのかいなかったのか。

判然とはしなかったが、しかし彼女は答えた。

「あんたがどこのクラスだろうと、どうだっていいわ。だけど、後悔しなさい。この一ノ瀬初花に　　『バミング・ビューティー爆撃の姫』にケンカを売った

ことをね」

この学園に数多存在する、『^{ジーニアス}天才児』の一人として。

第一話 始まりを告げる男（前書き）

どうも、読んでいる方がいらっしゃったら、こんにちわh a y a t
eです。

この第一話は、ある意味まだプロローグのようなものです。派手さ
もまったくありません。本格的な始動は次からです。

そんなこんなで、今回もよろしく願います。

第一話 始まりを告げる男

これも運命だと思えば少しは楽になるだろうか、と少年は考えた。
あるいは、夢でもいい。

とういうより、夢であってくれ。

そんな現実逃避の願望を胸に、左手で自分の頬をつまみ引つ張つてみる。

痛い。

そして、それだけ。

「……だよな」

諦めたように呟く少年の耳には、現在進行形で歓声が聞こえている。むしろ、歓声しか聞こえてこない、と言うべきか。

その事実思い至り、少年は周囲を見渡す。

とある公立高校の校門をくぐってすぐに設置された、やたらに数字の羅列が書き連ねられた立て板。そしてその前にわらわらと集まる自分も含めた集団。

彼らは種々様々な、という前置きはつくものの、皆一様に制服を着込んでいた。詰襟、セーラー、ブレザー……無論自分も、三年間通い通した中学校の詰襟を着込んでいる。

そして、もう一つ。

目に入る全員が、まるで少年に見せ付けるように（被害妄想だという自覚はある）、笑い、あるいは泣き、しかし心から幸せそうに大騒ぎしていた。

なんのことはない、実に典型的な合格発表の模様だった。
ただし。

「はは……俺以外、全員受かってやんの」

もはや乾いた笑いしか出ない。

自分だけがあの輪に入っていけない。なぜなら、自分は不合格だったから。

受験番号なら、十回は確認した。それだけでは飽き足らず、一から順番に見ていき、何かの手違いで自分の番号が紛れ込んでないかも探した。ドッキリではないかと、プラカードを持ったスタッフがいないかも探した。

結果わかったのは、どういう冗談か、自分以外の学生が一人残らず合格していたという、ふざけるなと叫びたくなるような現実だけだった。

「……………」

もう一度、頬をつねってみる。

痛い。

やはり、それだけ。

「はあ」

そもそもなぜ自分は落ちたのだろう、と少年は考察してみる。

ボーダーと呼ばれる、目安となる成績くらいは取れていた。過去の合格者たちを見ても、少年の出来ならば通っても不思議はない、どこか順当に行けば通るはずだった。

事実、少年の担任も「これならば問題ないだろう」と太鼓判を押してくれた。その全てを鵜呑みにしたわけではないが、実績のある教師だったこともあって、自分の人生における重要な選択を決定したのだ。

当然のことながら、内申も抜かりない。特別な役職（生徒会関連

など）に就いたり、無遅刻無欠席とまではいかないが、ある程度模範生と呼べるレベルではあった。

やはり、何を振り返っても、落ち度は見当たらない。
でも、落ちた。

それが、それだけが、結果。

何時間この場で考えても、この現実是不変。

「……帰ろ」

首をすくめて、心持ち視線を下げて、少年は踵を返す。

三月の風は、まだ寒い。

防寒着を身につけなかったことを悔やみながら、少年は歩き始める。

そして、その足が校門に差し掛かったところで、一度振り向く。

誰も彼もが幸せそうにしているのを目にして、

「……………」

何も言わずに、少年は 高瀬一夜は家路についた。

これが、一ヶ月半前の話。

* * *

一夜が公立高校の受験に失敗した日から、すでに二週間の時が過ぎ去っていた。

もちろんその間、何もなかったわけではない。

担任からの慰問ついでに私立紹介を受けて、見当の末にその私立高校に通うことはすでに決定していた。あっさりと決まったことからわかるとおり、こちら辺では滑り止め専用とまで言われるほどの学校ではあったが。

そんな事情があるとはいえ、なにはともあれ、ひとまずは高校に進学できることになったわけである。

既に受験失敗という精神的な傷もある程度癒えていたこともあいまって、一夜は心機一転これからの未来に思いを馳せていた。

そんな折だった。

八雲断が、高瀬家のインターホンを押したのは、やくもたち

インターホンでの呼び出しに応じたのは、一夜だった。

常ならばそういった雑事は母親である高瀬静たかせしずに任せているのだが、あいにくと今は買い物に出かけていていない。

ついでに言えば父親は工作中、中学生の妹にいたっては春休みを利用して友達と旅行に行っている。

必然的に対応できるのは一夜一人になるわけだ。

「えっと……どうぞ」

「これはどうもご丁寧に。いただきます」

初め、一夜はこの来訪者を家に上げる気はなかった。

しかし、八雲と名乗ったこの男が玄関前で語った内容、そして持参してきた一冊の資料が、一夜に現在の状況を作らせた。すなわち、八雲を招き入れるという状況を。

「いやーおいしいですねえ。これ、どこかの銘茶だったりします？」

「別に、そんなことはないですけど……」

高瀬家のリビング。

ダイニングテーブルとは別の、足の低いテーブルを挟んだ二脚のソファ。そのうちの一つに、背もたれに寄りかかる、などとはせず、に背筋を伸ばし、八雲は一夜に差し出されたお茶（無論、銘茶でもなんでもない安物）を飲んでいた。

その反対、もう一脚のソファに腰を下ろした一夜は、ぼんやりとそんな八雲を眺めていた。

（この人が、あの『天樹学園』のスカウトマン、か……見えないな）

一見して、スカウトマンというよりはサラリーマンといった方がいいような男だった。

仕事の賜物か、あるいは別の理由からか、くたびれたスーツとよれたネクタイのせいで敏腕という印象はまったく受けない。

ただし、容姿はそれなりのものだった。三十三という年齢（本人が勝手に喋った）よりも大分若く見える顔立ちを、銀縁のシャープな眼鏡が飾っていた。童顔のせいかな、くせつ毛の黒髪も愛嬌に見える。

もつと服装に気を使えば、案外モデルでもやっていけるんじゃないか？ と一夜は思った。まったくもって一夜には関係ないことだったが。

コトリ、と音があった。

その音に一夜ははっとなる。少々ぼんやりしすぎていたようだ。

音源は、八雲がテーブルに置いた湯飲みだった。

「さて、と。詳しい話はお母様がお戻りになってから、と思ってい

たのですが…… お戻りになりませんか？」

困ったように軽く髪をかく八雲。

確かにそうだな、と一夜も無言で同意した。

静の帰りが随分と遅い。彼女が買い物に行ったスーパーはここからそう遠くない。常ならば、もっと早く帰ってくるはずだ。

どうせ近所のおばさんにでも会ったのだろう、と一夜は適当に当たりをつけてから、

「あー、もしかしたらまだ結構かかるかもしれません。知り合いに会ってたら話し込んでると思うんで」

「ふむ……。そういうことでしたら、先に一夜君にお話したほうがいいかもしれませんねえ。いつまでもこのままというのも、あなたが気まずいでしょうし。かくいう私も、あんまり初対面の人と二人きり、というのも気まずいですし」

（それはスカウトマンとしてどうなんだ？）

とは思ったが、場を和ませるための冗談かもしれないので黙っておく。

冗談だしたら欠片も和んでいない、ということも含めて。

八雲はその態度をどう受け取ったのか、一度頷いて、

「そうですね……。とりあえずは、先ほどお尋ねしたことを、もう一度訊き直しましょうかねえ。ほら、私ってそういう演出も大事にするタイプですから。核心部分から話し始めるって、かつこいと思いますか？」

あんたの持論はどうでもいいから早く話せと思いながらも、一夜

は「はあ」と曖昧に頷く。

八雲はかすかに笑い、「では失礼して」と前置きしてから、

「高瀬一夜君。あなた、天樹学園にスカウトされる気はありますか？」

天樹学園。

初等部から高等部までを一挙に擁する、いわゆるエスカレーター式の学園であり、また広大な敷地や桁違いの設備などでも知られている。

が、それらに反して生徒数は全体で千五百人前後と、かなり少ない。もともと、当然のことながらそこには『とある理由』が存在しているのだが。

そしてその『とある理由』から、この学園は一つの顔を持っていた。

日本の未来を担う学園、という顔を。

加えて言えば、この顔によって、天樹学園は日本で知らぬ者なき超有名校として名を轟かしていた。

それも単純な、国民のエリート校に対する羨望としてではない。政府やメディアでさえも、そういった見方をしている。政治家を志す者たちが、選挙で天樹学園への支援をマニファクチュアの一つとすることは珍しくないし、適当にテレビのチャンネルを回せば、天樹学園に関するニュースが大抵一日に一つはやっている。

では、なぜ天樹学園がこれほど国の注目を集めているのか？

それは謎でもなんでもない、答えは実に単純明快だ。誰かに聞けば、すぐにこう言ってくれるだろう。

曰く。

天樹学園には、

日本の未来を担う学園には、

『天才』が集っている。

「ようは坩堝るじほなんですよ、天才たちの。日本中から天才や神童と呼ばれる青少年少女を、我が学園は発掘・育成しているわけでしてねえ。それも、学問、芸術、武術、またはそれらに当てはまらずとも、私たちはとにかく突出した才能をかき集めているんですよ。才能ある若者は、文字通り国の宝、未来ですからねえ。天樹学園があればどこまでに期待を背負っているのも、私が言うのもなんですが、納得できますよ」

あなたは？ という質問の形で、八雲は長口上を終えた。

自分でも芸がないとは思うがまた「はあ」と曖昧に同意して、一夜は考えを巡らせる。

（そんなこと、今更言われるまでもねえ。今の世の中じゃ、天樹学園がどんな学校かなんて、常識レベルで知られてる。もちろん、俺だって……だから、知りたいのは ）

持参した『一般には出回らない』パンフレットを卓上に広げて、ちらほらと施設説明を始める『天樹学園のスカウトマン』に視線を向けつつ、まだ肝心な部分が聞けていないことに眉をひそめる。

（……こつちから聞いてみるか）

向こうから言い出さないのなら、こちらから促せばいい。
だから一夜は思い切って、『当たり前』の疑問をぶつけた。

「何で俺を？」

「ここら辺の園芸は、私が趣味で担当してましてねえ。初めはただの代理だったんですが、思いのほかこれが楽しくて。今ではかなりはまって　ハイ？」

どう考えても個人的な話に移行しつつあった八雲は、突然の質問に首をかしげた。

一夜は、繰り返す。

「『何で、俺を』？」

「……何で、といいましてもねえ。それが私の仕事なものですから」
違う。

そうじゃない。

訊きたいのは、そんなことじゃない。

「あんたが本当に天樹学園のスカウトなら、当然俺のことを調べてるんですよ？　だったら、おかしいことがある」

「と、いいいますと？」

簡単だ、と置いてから、

「『俺には何一つ才能なんてない』。天才ばかりが在籍している学校に、俺なんか誘われるわけがないんだ」

そう。

そこが、一番の疑問点だった。

高瀬一夜は、自他ともに認める凡人である。

八雲が言った『突出した才能』なんて、一つたりとも持っていない。

勉強、スポーツ、美術、音楽、武道。何をしたとしても、人並みのことしかできない。それ以上に、どうやっても届かない。

自分は、天才なんかじゃない。

どこまでも、ただの普通の人間だった。

だというのに。

よりもよって、そんな自分にかかった『スカウト』という千載一遇のチャンス。入学〓将来を約束されたとさえ言われる学校からの、それは確かに間違えようのない勧誘だった。

しかし、一夜だって自分のことはよくわかつている。

だからこそ、「はいそうですか」と、このチャンスを気楽に受け入れることはできなかった。

そしてそんな一夜の心情を知ってか知らずか、八雲は指を組みながら、一夜の問いかけに返答し始めた。

「確かに……こういつては失礼なのですが、あなたはどう転んでも天才の類ではありません。凡夫、としか言いようがないわけです」

「……………」

少し、カチンときた。

自覚はあるとはいえ、他人から改めて告げられて、気持ちのいいはずがない。

だから一夜は渋面を作ったのだが、

「しかし、それでいいですよ」

「え？」

続く奇妙な逆接に、一夜は思わず目を見開いた。

そして、

八雲断は、

その反応をこそ待っていたかのように、柔和な笑みを作った。

「『それこそが』あなたの才能なのですから」

そつと、一言を付け加えて。

これが、一ヶ月前の話。

* * *

この約一カ月後。

五月一日に、

天才と凡才の物語は、幕を開ける。

第一話 始まりを告げる男（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

第二話 天樹学園（前書き）

なんといいますが、今回もあんまり話が進んでいません。この作品はなるべくじっくり作っていきたいので。というか、未だに生徒が出てこないって……。

お気に入り登録や、感想をくれた方がいらっしかったです。これからも読んでくれる方がいるように、がんばりたいと思います。

第二話 天樹学園

五月一日。

今だ春の穏やかな陽気が残る、朝。

広大な敷地面積を誇るがゆえに、いくつかの出入り口を設置せざるを得なかった天樹学園、その『出入り口』の一つ。

ちょうど西に位置する『第一ゲート』の前に今、一台の黒塗りの外車が停車した。

瞬間、それを見計らったように（実際そうなのだが）声が響く。

『IDの提示をお願いします』

それは、車の正面にある鋼鉄の扉から聞こえてきた。おそらくはどこかにスピーカーがあるのだろうが、一見しただけでは発見できない。

運転手の男は指示に従い、スーツから一枚のカードを取り出し、フロントガラス越しに門壁 正確には、そこに埋め込まれた高性能小型カメラ に、それをかざした。

数秒の間があつてピーツという電子音が鳴り響き、機械仕掛けの門は両開きの要領で、徐々に中心線から左右に隙間を広げていった。丁度、車体が通れる幅まで。

『IDを確認しました。『運搬者』ドライバー・かぶらぎ 鈴木。お通りください』

ドルンツ、とエンジンがうなりを上げ、マフラーから排気ガスが漏れ始める。

わずか間を置いて、タイヤが砂利を噛む音が聞こえてきた。車はゆるやかに発進し、ゲートの内側へと 天樹学園の敷地内へと

車体を滑らせていった。

『第一ゲート』を通り抜けると、コンクリートで舗装された一本道が始まり、両脇にはわざわざ一から植林して作られた人工林が広がっていた。

車内からでは立ち並ぶ木々しか見て取れないが、その奥に分け入れば、これまた人工的に作られた湖や、数十種類の生物たちを確認できる。

もちろん、一般的な学校であれば、敷地内にこんなものを用意する必要はない（というかそもそもそんな面積はない）だろうが、生憎と天樹学園（てんじゅがくえん）ではいくつかの使い道がある。

一例を挙げるならば。

たとえば、学園には芸術系の才能としては一般的な、『絵画の天才』が何人か所属している。当然のことながら、彼らに用意された美術室ではモチーフに困らない。だが、どうしてもそのほとんどが人工物になってしまう。

そこで、この人工林の出番となる。百パーセントの大自然というわけではないが、それでも学園にこもっているよりはよほど自然的な絵が描ける。とりわけ、風景画を得意とする『天才児』にとつては、それはこの学園に在籍する一つの大きな理由にもなっていた

「うへえ。機械仕掛けの校門に、今度は大自然かよ。さすがは噂の天樹学園、型破りなことこの上ねえな。金持ちつてのはこれだから嫌だね」

のだが、そんな事情を知らない高瀬一夜の目には、ただの道楽としか映らなかった。

車を走らせている運転手 楠木裕也かふきゆうやは小声の皮肉に反応し、ルームミラーで、後部座席に座り窓の外を眺めている一夜をちらりと見て、

「言うなよ、少年。型破りつてのは俺も同意するが、別にお遊びでこんな大層なものをこしらえたわけじゃないさ。こう見えても、ちゃんとした理由の一つ二つはある」

「ふーん」

「このガキ……まったく信じてないだろ？」

いかにも興味ありませんよとでもいいかげな口調に、楠木はわずかに口を歪めた。

（おっと、イカン。もっと冷静さを保てよ、俺）

自分を落ち着かせるためにいつもするように、一度無精ひげを撫でてから、とりあえずは間違いを正すことから始める。

「さつき君はあの『ゲート』を校門と言ったが、それは違う」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。あれは単純に学外と学内を隔てているだけさ。そもそも、いちいちID認証してから開け閉めしているような校門なんて、君だって嫌だろう？」

それはまあ確かに、と頷きながら、一夜は楠木に尋ねた。

「じゃあ、本物の校門は？」

先ほど鐫木がそうしたように、ルームミラーで気安い運転手の顔を見ると、彼はいたずらっ子のように笑っていた。

その意味を考えるよりも早く、

「すぐにわかるさ」

鐫木は、そう答えた。

そして、

まるでそれに合わせたかのように、
車が人工林の狭間を抜けた。

そこに、世に名を馳せる、天才たちの学び舎　天樹学園が見えた。

『第一ゲート』は学園正面のルートに建設されているため、真っ直ぐに進めば、そのまま天樹学園を真正面から視界に収めることができる。

鐫木が「すぐにわかる」と言ったとおり、レンガの塀と鉄門で構成された校門も見えていた。

「あれが、天樹学園……」

思わず身を乗り出し、運転席と助手席の間から、眼前にそびえる建築物を見据える。

それは、イメージとは違い、極端に豪奢といった造りではなかったが、それでも一般の高校と比べるべくもなくデザイン性に富んだ様相をしていた。

見える限りでは四階建て、大まかな形としては凸形のシンメトリ

―構造。そしてその凸の尖った部分には、大きく天樹学園の校章大樹と鳥が合わさった意匠　が描かれている。

一夜には様式など詳しいことこそわからなかったが、以前在籍していた『建築の天才』の発案で今の形に改装されたということは聞いていた。正直建築の良し悪しの知識など持ち合わせていないが、それでも一夜は目を引かれ、わずかながらにせよ天賦の才を感じ取った。

予想通りの反応に満足したのか、鍋木は声にわずかに喜色を混ぜ、
「正確に言えば、『あれも』天樹学園だ。あの校舎がメインには間違いないが、周りにも目を向けてみな」

鍋木のアドバイスに従って、一夜は視線をせわしなく動かす。
一番初めに飛び込んできた校舎に意識がいつていたが、言われてみればそこかしこに何かしらの建物が建っている。小ささまざまな建物が立ち並ぶ様は、さながら小規模な街のようにも見える。中には時計塔らしきものもあって、一夜は目を見張った。

「すげえ……。もしかして、これ全部が？」

鍋木が、一夜の質問を思わず受け取り、頷く。

「そう。周辺にある建物も、もつと言えばこの敷地も全てが天樹学園だ。体育館や室内プールなんてのは言うに及ばず、学生たちが使う研究棟や巨大図書館などなど。およそ全ての『才能』を満足させられるように、付属施設としてあれらは建設されたんだ」

「あれでただの付属なんですか。中には、普通の校舎レベルの大きさもあるけど」

「君がさっき言ったとおりさ。文字通り『型破り』なんだよ、この学園は。　　っと、それよりも、もうじき着くぞ。準備しな」

「はい」

短く返事して、一夜は隣の席に置いたリュックを手取る。中には筆記用具など簡単な物しか入っていなかった。なにしろ、まだ教科書のひとつも貰ってないのだから。

それから一夜は今自分が纏っている紺色のブレザー　　天樹学園の制服のネクタイを軽く引っ張った。

そこまでして、やっと一夜には自覚が芽生えてきた。

（夢じゃない）

これは間違えようもない、現実だという自覚が。

（俺は、今日から天樹学園の生徒だ）

誉れ高き学園の一員になったのだという自覚が。

「……よしっ」

だから一夜は気合を入れるように声を出し、

そして車が、校門前で停止した。

ガチャリ、と右側のドアがひとりでに開き（タクシーと同じくエンジンの吸気負圧を利用しているのだろう）、鍋木がこちらを振り返って、

「さあ、到着だ少年。歓迎の言葉はもつと適任がいるから言わないが、君の才能が未来に羽ばたくことを祈っておこう」

才能、というところに少し反応しつつも、一夜は礼を言い、外に出る。

車外に降り立った足が、久しぶりの地面の感触を確かめた。

再び、ボタンとしまるドア。一夜はその音に押されるように、歩き始める。

（そんじゃま、一丁行ってみようか！）

そしてそのまま、一夜が来ることが伝わっていたのか開きっぱなしになっていた校門をくぐり、天才たちがひしめく天樹学園へと、足を踏み入れた。

これからの未来に、思いを馳せて。

* * *

あらかじめ受け取った校内案内図に従い、一夜は昇降口ではなく、来客用（といっても来客など滅多にないが）の玄関から校内に入った。

そのすぐのところ、「応接室」とプレートが出ている部屋の前まで歩き、扉をノックする。

間髪をいれず、返事が来た。

『どうぞ』

その声が聞き覚えがあることに少し驚きつつも、一夜はノブを回

した。

「失礼します」

言いながら、奥へと力を込める。扉は何の抵抗もなく開き、隔た
りを消した。

一歩踏み入ったところで、一夜は室内にいた人物に迎えられた。

「どうも、お久しぶりです、一夜君。一ヶ月ぶり、ということにな
りますかねえ？」

「どうも」

一礼して、その人物を一夜は見る。

くたびれたスーツ、銀縁眼鏡、黒のくせつ毛。これらのパーツを
持つ人間を、一夜は今のところ一人しか知らなかった。

その名を、口に出す。

「八雲さん、でしたよね？」

「ええ。合っていますよ」

にこり、と笑って八雲断は肯定した。

肯定して、一夜に着席を促す。

一夜は素直に従い、低いテーブルを挟んで向かい合わせたソファ
の一つに座る。反対側には、もとより八雲が座っている。

奇しくも一ヶ月前と同じ構図になったな、と詮無い考えを頭の片
隅に押しやりながら、一夜は口を開いた。

「スカウトマン、じゃなかったんですか？」

言外に、なぜお前なのか、という意味を込めていた。

普通こういうのは、校長なり担任なりが当たるものではないのか。少なくとも、スカウトマンが出てくるなどとは予想の外にあった。

「そうですねえ。誤解なきように言うと、私、スカウトマン『ではない』んですよねえ」

「えっ？」

前提が崩れたことに、一夜は驚いた。

八雲が慌ててフォローに入る。

「ああ、申し訳ありません。そう言ってしまうと、あなたを騙したみたいになっちゃいますよねえ。そうじゃなくて、この前は単なる代理だった、というだけの話ですよ」

「代理？」

「ええ。本当にあなたを迎えに行くはずだったスカウトマンに、ちよつとした小用ができてしまいましたねえ。そこで急遽、手が空いていた私にお鉢が回ってきた、とまあつまりはこういうことですねえ。とはいえ、私も本職は違いますから、手続きに一ヶ月もかかってしまいました。お恥ずかしい限りです」

そう。

今は、五月。八雲からスカウトを受けてから、すでに一ヶ月が経っていた。

あの日、「転入の目処が立ち次第、ご連絡いたします」と一夜（と帰宅した母）に告げ、八雲は高瀬家を去っていった。それから何

の音沙汰もなかったのだが、つい先日やっと転入日決定の報が飛び込んできたのだった。

その空白の一ヶ月に、天樹学園の裏側で何があったのかは、わからない。言葉通り手続きに時間がかかっただけかもしれないし、そうではないかもしれない。ただ、現実問題として、一夜がここに通えるようになったのは確かだった。

と、そんなことをつらつらと考えていると、八雲がやおら立ち上がり、

「さて……では、一夜君。あまりここで話すのもなんですから、そろそろ出発しましょうか」

「出発？」

怪訝に思いながらも、とりあえず相手に合わせて立ち上がる。

八雲は「ええ」と首肯して、

「あなたの、教室にですよ。これから三年間、あなたが過ごす、教室です」

後ろ手を組み、八雲は扉へと歩を進める。

一夜が閉めた扉をゆっくりと開け放ち、彼は案内人のように右手で外を示した。

そして、

「ようこそ、一夜君。我らが天樹学園へ」

相変わらず口元に微笑を湛えながら、歓迎の意を告げた。
なぜか、

一夜は、その微笑から目が離せなかった。

天樹学園の校舎は、一般には知られていないが、実は二種類存在している。

一つは、先ほどまで一夜がいた応接室も含んだ、通称『西棟』。

またの名を『一般校舎』メジャー・クラスとも呼ばれるそこは、『表』の校舎の役割を担っている。あっさり言ってしまうえば、世間が持っている『天樹学園に対するイメージ』はこの西棟が元になっているのだ。

学問系の天才、運動系の天才、芸術系の天才、技術系の天才、エトセトラエトセトラ……。少し言い方はおかしくなるが、およそ『一般的な天才』たちが所属しているのが、その原因である。認知度が高く、卒業後に広く名が広まることになる、いわば『ありふれた分野の才能』を持つ者たちは、全て西棟に集まっているのだ。

そして、もう一つ。

『西棟』と対をなす通称『東棟』。

またの名を『特別校舎』マイナー・クラス。『裏』の校舎の役割を担っている、天樹学園のブラックボックスである。

こちらの校舎に所属している生徒は、西棟とはまったく異なる基準で選ばれている。

卒業後もほとんどの人間に知られないような、危険性や特異性が高い、知られざる天才たち。オンリーワンの才能も多い、いわゆる、ぶつとんだ連中の巣窟なのだ。

だからこそ、イメージ戦略に使われようはずもないし、表舞台に立つことも皆無なのだった。

「とはいえ、知られていないというだけで、本当は世間で活躍したりもしてるんですけどねえ。まあ、世間はイメージ先行というか、あまり受け入れられない天才たちも大勢いるんですよ。だからこそ、幼いうちからその才能を保護し、社会に送り出せるように私たちが

いるわけなんです」

なるほど、と頷きながら一夜は先導する八雲について行く。

一夜たちはすでに西棟を出ていた。今は、一度西棟の裏手に回り、そこから赤レンガの道を真っ直ぐに進んでいるところだ。

遠く、というほどではないが、いくらか距離がある先に見えるのは、西棟とはまた違った趣をした校舎、件の東棟である。

西棟と直線上に建てられているそれは、まずもって、サイズが一回り小さかった。横幅は言わずもがな、高さも三階になっている。もつとも、東棟の選別基準に希少性も含まれることを考えれば、自明の理ではあったが。

（希少性が条件の一つってことは、それだけ総生徒数は少なくなるはずだしな）

と、一夜は適当に推測してみる。

まあ、それはそれとして。

「それで、何で俺はその『特別校舎』マイナー・クラスとやらに所属することになるんですか？」

道すがら、一夜は問うた。

といつてもなんとなくは予想がついている質問だったが、一応答えは聞いておくべきだと思ったからだ。

案の定、返答は想像通りだった。

「もちろん、君の才能が『特別校舎』マイナー・クラスの在籍条件にひっかかったからですよ。危険性、特異性、希少性……どれが対象になったのかは、あなたが一番わかっているでしょうが。私が一ヶ月前にあなたに言ったこと、覚えてます？」

「俺の、才能の話ですか？」

内心では、本当に『そう』なのか疑わしい自らの才能に疑惑を抱きつつも、一夜は返した。

「ええ、その通りです。　ああ、それと、これから自分の才覚を『才能』^{ギフト}と呼び習わしてもらいますので、そのつもりで」

「ギフト？」

「はい。特別、決まりというわけではないんですけどねえ。ここではほとんどの生徒がそう呼称しています。なんでも、元々は十数代前の生徒会長　皇さん^{すめらぎ}と言う方なのですが　が発祥らしいのですが。確か、『私たちの才は、神からの贈り物である。故に、私は自らの天分を『才能』^{ギフト}と称す』……でしたか」

「……………」

今度は返さず、一夜は無言で八雲の後ろに続く。

（『才能』^{ギフト}、か。もし本当に神様からのプレゼントだっていうんなら、笑えるな。なんだってこんなヘンテコな才能を俺にくれたんだか）

脳裏に浮かぶのは、四月初めに聞いた台詞。

『「それこそが」あなたの才能なのですから』

それを最初耳にしたとき、一夜にはよく意味がわからなかった。

だが、その後に続く話を聞いて、次第にどうということなのかを飲み込んでいった。

かなり、微妙な話ではあったが。

（微妙でもなんでも、『これ』のおかげでここに来れたんだ。文句も言ってられねえか）

知らず、拳に力が入る。

今更この学園を退学になるわけにはいかない。すでに担任が持ち込んだ私立高校すべりどもの話は蹴っている。ここで退学にでもなるうものなら、最終学歴が中卒ということになってしまう。正直、それは避けたい。もう一つ、俗な理由もあることだし。

と、思う間に、気づけば前を行く八雲が立ち止まっていた。

つられて一夜も止まり、八雲の向こう側に目を向ける。

そう、

天樹学園のブラックボックス、マイナー・クラス『特別校舎』に。

八雲が、正面入口へと至る階段を昇り、運動場のトラックを半分に割ったような形の木製扉（ご丁寧に紋様が彫られていた）の元までたどり着く。

今は観音開きに開かれているその大扉は、横幅がかなり広い。毎朝多くの生徒を迎えることを想定された造りだった。

一夜は、これどうやって閉めるんだ？ などと疑問を思い浮かべたが、その思考をさえぎるかのように、声がかかった。

「行きましょうか」

「はい」

八雲が言い、一夜が答える。

ほどなく二人の姿は、校舎の中へと消えていった。

第二話 天樹学園（後書き）

ご意見・ご感想・質問など、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5615z/>

N O R M A L I Z E

2011年12月26日21時57分発行